

# 巻 頭 言

人間発達学部学部長

早 川 純 子

子ども教育学科は、人間発達に関わる専門家として地域の核となり「人の育ちと地域の育ち」を支援し活躍できる人材の育成を目指している。その目的のもと、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭をはじめ、子ども達の幼児期・学童期を支える人材を養成してきた。都城市で初めての教員養成機関として新設されてから10年、卒業生の8割以上が「先生」となり、地域の教育や保育を支えている。

令和2年度は11期生を迎え新たな10年に向けてスタートしたが、新型コロナウイルスという脅威に直面し、その対応に明け暮れる一年となった。この未曾有の感染症は世界を、また私たちの日常を一変させ、大学教育のあり方も変容させた。オンラインによる遠隔授業の導入がその一つである。本学では地域の感染状況を見極めながら対面授業を再開させたが、学びを止めないために多くの授業を遠隔で実施した。通信環境が十分でない学生への支援といった課題も残るが、教育効果については肯定的な意見も少なくない。遠隔授業の良さは、双方向の対話など積極的な授業参加を促し、障がいのある学生にとっても利便性のある点が挙げられる。しかし、対面の重要性は、キャンパスで実現する学び合いや交流、言葉を交わし同じ時間を過ごすといった多様な経験、人と人とのつながりや安心感を得られるところにもある。ポストコロナの時代には、遠隔と対面を柔軟に使い分けたり、組み合わせるなど、教育の可能性をさらに広げ、付加価値の高い学習機会を提供することが求められよう。新型コロナ感染症はまだ収束を見ないが、遠隔と対面のバランスを取りながらより良い学びを作り出していきたい。

なお、学科では教育の質保証の取り組みとして、次年度に抜本的なカリキュラム改革を予定している。子どもの育ちをめぐる環境は、激しい社会変化に伴って多様化し新たな課題を生んでいる。そのため、今日的課題に対応する専門性と対応力を備えた人材の育成が求められており、学科はその社会的要請に応える責務がある。複雑化する社会課題の解決に寄与するため、今年度、学科ではこれまでの保育、幼稚園、小学校に求められていた専門性を基盤として、特別支援教諭免許を保育者希望者も取得可能とする体制を築いた。これからの子ども教育学科は、令和の新時代を機に、南九州大学の歴史と特性を基盤にして、時代の要請する専門性を備えた「子どもスペシャリスト」の養成を新たな目的に掲げていく。